

# 東日本大震災 災害活動報告（復興活動報告）

宮城県 岩沼市消防団 団長 田村 善洋



『平成23年3月11日（金）14時46分』、東北に住む人間には一生忘れられない日となりました。我が街、岩沼市もその時、長い揺れが徐々に大きな揺れとなり西側の山を見ると土煙が山を覆っていました。激しくなっていく揺れの中で誰もが想定していた『宮城県沖地震』が頭の中を過ぎったはずです。そして3分とも5分とも感じられた揺れが収

まり、これからの地震被害への対応を考えながら市の災害対策本部へ向かいました。それから数十分後、我々の想像を遥かに超える大津波が沿岸部の全ての構築物をのみ込み、そこに住む多くの住民の生活も何もかも流し去りました。



浸水した田畑と瓦礫でふさがれた道路



海岸の捜索を行う消防団員（3月21日）

管内の被害状況は、死者178名、行方不明者8名、家屋の全壊流失474戸、被害家屋2,241戸、最多避難者数6,500名、その他多くの工場施設が壊滅。管内消防団の被害も、死者6名、詰所の全壊流失5箇所、ポンプ積載車等の流失が3台と甚大なる被害を受けました。

市内の消防団員は、地震発生直後には各部詰所に集結し担当区域の警戒巡回活動や被害情報の収集を実施。また、沿岸部の消防団は大津波警報発令に伴い、住民への避難広報や迅速な避難誘導を行ないました。津波発生後も高齢者や身体の不自由な住民を避難させる為に何度も被災現場に向かいました。活動中、地元住民を守る為に身を挺して救助に向かい命を落とした団員もい

ました。度重なる大きな余震の中、全消防団員が被害の大きい沿岸部で津波のため浸水し孤立した住民の救助活動や避難誘導、被災状況の情報収集等の活動を続けました。

しかし夜が明けると津波被害の状況が想像以上に大きく悲惨で、これからの対応が如何に困難で大変なことかを我々は痛感しました。休む間もなく入る救助要請。増え続ける行方不明者の情報。そして活動中の団員にも家族がまだ不明な者、自宅が全壊した者もいる、そんな究極の現場で団員同士が助け合い、消防署員、警察、自衛隊と協力して、まだ生存しているであろう、行方不明者の捜索活動を懸命に行いました。捜索現場は、津波で溜まった海水、損壊流失した家屋や車等の瓦礫、海岸から根こそぎ流された防風林の松の大木がまるで捜索活動を邪魔する様に阻みました。また、沿岸部の被災地区は被災前と被災後の風景がまったく異なり、まるで別の場所のように感じる程でした。しかし地元の消防団員が参加することで、捜索の大きな力になりました。

日が経つにつれ、他県の緊急消防援助隊や自衛隊の増員、また市内では婦人防火クラブによる炊き出しや各地からボランティアが駆けつけ、様々な応援や支援を頂きました。一方では、多数の行方不明者が遺体で収容され、その中には不明の消防団員も遺体で発見されるなど辛い思いも経験しました。現在も、行方不明者の捜索は続いて



防風林での行方不明者捜索（4月9日）



避難誘導中に津波に遭遇し流失した積載車



仙台空港から流失した飛行機と車

おります。最後の一人が発見されるまで、消防団も出来る限りの活動をしていなくてとは考えております。



岩沼市の長谷釜地区 津波にのみ込まれた小型ポンプ自動車



空港近くの貞山運河に沈んでいた車。中には3人の方が…

最後に、今回の東日本大震災で我々岩沼市消防団も甚大なダメージを受けまし

た。6名の団員を喪い、詰所や積載車が損壊流失しました。また沿岸部の団員の家や田畑等の生活、全てが津波によって奪われました。そして、未だ数多くの団員が不自由な避難生活を余儀なくされている現状です。これからの消防団活動も現実的にも精神的にも厳しく、正直立ち直るにはまだまだ力不足なのが本当のところですが。しかし、このままずくまのまま、立ち止まったままでもいいのでしょうか？

いや、我々は消防団です。このような被災状況でも、立ち上がり前に進んで行けるのではないのでしょうか。それは、消防団員だったからこそ命を落としても津波から地元住民を助けに向かえたのです。消防団員だからこそ、一晩中でも救助活動が出来たのです。

消防団員は、どんな状況でも一歩踏み出す余力があると私は信じます。

今こそ我々消防団員が一致団結して地域住民の安全安心を守り、復興の力になる時ではないでしょうか。



捜索中の消防団に、婦人防火クラブ員が炊きだし